

琉球大学学術リポジトリ

沖縄戦と戦争動員

－「軍神大舂」顕彰運動と関係者とのインタビューを中心－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2009-08-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 保坂, 廣志, Hosaka, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/12172

沖縄戦と戦争動員

— 「軍神大舩」顕彰運動と関係者とのインタビューを中心に —

The Battle of Okinawa and War-time Mobilization
— From Interviews with Those Involved
in the Ohmasu Memorial Campaign —

はじめに

筆者は、先に「軍神大舩と新聞—軍神の誕生とその効果・普及の研究⁽¹⁾」と「戦争とジャーナリズム—新聞にみる軍神誕生と民衆の戦争動員に関する一考察⁽²⁾」を発表した。今回の「沖縄戦と戦争動員—『軍神大舩』顕彰運動と関係者とのインタビューを中心に—」は、その続編を成すものである。

本論文の目的は、沖縄近・現代史の中で初めて誕生した「軍神大舩」に焦点をあて、戦時非常時体制下で庶民がそれを如何に受容し、どのように対応していったのかを、主として関係者への聞き取り調査（インタビュー）を中心にまとめたものである。

さて、沖縄戦の研究は、内外の資料を駆使し、近年著しく進展した。庶民の戦争に対するのめり込みについても『沖縄県史』（沖縄戦記録1）第八巻、同九巻（沖縄戦記録2）を中心に、市町村史、字史、さらには回想録にいたるまで実に多くの書籍が上梓されている。今回私が試みた方法は、沖縄戦に到る前段階に派生した一つの社会的出来（「軍神大舩」の出現）

を中心に、それに直接関与した人々を訪ね、多角的かつ立体的に沖縄戦に到る民衆の戦争動員のあり様を把えようとするものである。

ただ、聞き取り調査のため、その検証と裏付けのための作業をどうするかの記事が残されている。インタビューの発言については、可能な限り周辺資料を渉猟し、記憶の不鮮明さや、証言の間隙を補ったつもりである。事実関係についての疑問点や、資料の判読に問題があるとするならば、その責任は一重に筆者にあることをお断りしておきたい。

最後に、聞き取り調査に応じて下さった関係各位に厚く御礼申し上げます。

一 「軍神大舛」と大舛家の人々

大舛松市は、1917（大正6）年8月6日、沖縄県与那国村字与那国35番地に、父満名、母ナサマの長男として生まれる。家業は農家で、父満名は、島ではめずらしいほど教育熱心であったと言う。

1932（昭和7）年3月、同村立与那国小学校高等科を卒業し、同年4月沖縄県立第一中学校に入学した。大舛は、学業成績がきわめて優秀で、4年、5年では首席を通している。在学中、同校に配属されていた榊利徳大尉と知合い、大尉の勧めで陸軍士官学校への進学を決める。これより後、大舛は「数学ヲヤラヌ日ハ眠ラヌコト」というほど勉学に励んだという。

こうした努力が実り、1937（昭和12）年4月、大舛は、沖縄県からはただ1人の現役合格で勇躍陸軍士官学校（予科）に入学した。

同校では、3年にわたり軍事学を中心に、戦術、戦史、軍政、築城、測図等を学び、さらには部隊付き見習い士官等を経験、1940（昭和15）年3月卒業した（陸士第53期）。

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

彼は、陸士予科1年時代の日誌に希望の兵科を騎兵科と答えている。しかし、寡黙にてしかも冷静、沈着な彼の性格がそうさせたのか、歩兵科に配属されることになった。

大舩は、陸士卒業後直ちに中国広東省三水在の第38師団第228連隊第1大隊に配属され、同年5月少尉に任官される。以後、1941（昭和16）年12月、太平洋戦争の勃発に伴い英国領香港島作戦に参加、同42年1月、モルッカ諸島アンボン島攻略戦、同年2月蘭領チモール島上陸作戦に参加する。そして同年11月、日米両軍の激戦が続くガダルカナル島に上陸、第1中隊中隊長（1941年8月、中尉に昇官）として陣頭指揮をとる。

同島の戦いは、日本軍の完全敗北に終わり1943年1月13日、大舩は同地において戦死した。時に27年間の短い生涯であった。

1943（昭和18）年10月8日、陸軍省は第22回大詔奉戴日に大舩の戦功が「上聞」に達した旨を公表、同日付けの本土紙、地元紙に「感状上聞に達す大舩中尉」という記事が掲載され、いわゆる「軍神大舩」が誕生した。もっとも本土紙には、「軍神」という言葉は一切使用されていないが、地元新聞は、上聞奏達者は「軍神」であるという従来の慣例にならい、競って「軍神大舩」という言葉を用い戦意高揚のシンボルとしてその普及に務めた。新聞は、大舩大尉（戦死後、一階級進級の大尉に昇格）の人となりや軍功を記事掲載し、特に戦時下唯一の県域紙であった「沖縄新報」は、小野重朗県立第一中学校教諭の筆になる「大舩大尉伝」を136回にわたり掲載し、県民に大きな興奮と感銘を与えた。

一方、県教学課でも二次にわたる「大舩精神浸透運動」を展開、地方の教育部会、思想対策委員会、大政翼賛会等をも巻き込み大舩大尉の軍人精神、敢闘精神の普及に務めた。

県下でのこうした熱狂的な大舩讃迎運動に対し与那国島にいた大舩大

尉の母堂（1893年＝明治26年生まれで、当時50歳）は、御子息の死をどう受け止めていたのだろうか。そこで、大尉の母堂大舩ナサマさんのインタビューを紹介しよう。

保坂 大舩顕彰大会が県下のあちらこちらで行われましたがそれらの集會に参加したことはありますか。

大舩ナサマ 沖縄本島で県葬⁽³⁾がありましたが、それっきり集會には出ておりません。その時遺骨をもらい、それを持って与那国島に帰りました。お父さんも一緒でした。当時船もなく、どこにも行きませんでした。

保坂 当時の集會の様子を新聞で見ますと、軍や県関係者の談話はよく載っていますが、ご両親の話はほとんどないものですから。

大舩 与那国島の集會には参加したのですが…。松市が亡くなった後、一中の田端一村先生が島に来まして、松市をどうやって養ったかとか、育てたかなど聞かれました。

保坂 個人感状をもらっていますが、それはどこで受け取りましたか。

大舩 それが下りたことはわかりますが、感状らしきものは見たことがありません。戦争でこなかったのかもしれないが、どこでどうなったのかわかりません⁽⁴⁾。

保坂 国から勲章をもらったと聞いていますが、どういう方法でもらったのですか。

大舩 戦前、たしか村役場の方へ取りに行ったのを覚えています。

保坂 勲章というと皆正装をして受け取るのですか。

大舩 いや、まったくそういう服装はしていません。当時の状況では無理だったと思います。

保坂 松市さんの沖縄芝居があったと聞いていますが、何か覚えていますか。

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

大舛 確か昭和19年8月か9月、遺骨を沖縄本島に取りに行った時見た記憶があります。確か真喜志康忠さんが松市の役をやり、南洋デブ（名城政助―筆者注）さんが、兵隊か何かの役をしていたのを涙を流して見ました。

保坂 松市さんが「軍神」といわれ、お父さんはなんておっしゃっていましたか。

大舛 お父さんは、松市の戦死のことを田んぼで作業をしていた時、役場の人から聞きました。そのときバンザイを叫んだといいます。

保坂 ナサマさんは、その時どう思いましたか。

大舛 お父さんはバンザイといったが、私は「シカタナラヌー、シカタナラヌー（仕方がない、仕方がない）」とあきらめました。泣いても仕方がないと思いました。

保坂 松市さんについて今はどう考えていますか。

大舛 松市は長男であった。苦勞して8人の子供を皆学校へも行かせたし。当時は、田舎だったこともあって、学校へ子供を行かせることにいろいろと言われたこともあったが、それは必要だと思っています。

保坂 松市さんの他に女子師範に行った四女の清子さんも沖縄戦で亡くなっていますが、どう思いますか。

大舛 仕方がない…国の為だから。

保坂 松市さんは、あまり物も言わず、大変静かな人だったと聞いていますが、どうですか。

大舛 あまりしゃべらなかつた。子供の時、隣近所の子供がワイワイさわいでいても、松市はあまりそれに加わらず、勉強ばかりしていた。

保坂 ところで子供達を学校に行かせるのに、どのようにしてお金を作ったのですか。

大舩 いま考えるとどうしてお金を作ったのか不思議ですね。トマト、大根、野菜でお金を作ったと思う。当時与那国島にはあまり野菜を作る人がおらず、それをあちらこちらで売ったと思います。

保坂 最後にお伺いしますが、白木の中に入っていたのは何でしたか。

大舩 老木を焼いた灰が入っていました。⁽⁵⁾

インタビューを実施した時、大舩ナサマさんは94歳で、方言しか出来ないこともあり、ご子息の重盛氏（当時は沖縄県警刑事部長）に間に入って頂いた。標準語に直されたため、方言のもつ独特のニュアンスは残念ながら失われてしまった。その後何回かナサマさんとお話をしたいと思い連絡を差し上げたが、容体が思わしくなく、実行に至っていないのは残念である。ナサマさんとの会話の中で特に印象深かったのは、本人とのインタビューの途中、大舩重盛氏の奥さんのキヨさんが次のように語った言葉である。「お母さんは、小野田郷郎さんがルバング島で発見され、日本に無事戻ったのをテレビで見ている、『かたわになってもいいから松市も戻ってきたらいいのにサー』とっていましたよ」というくだりである。軍国主義のさなかに学問に秀でた松市は、父の教師になって欲しいというたつての願いを振り切り職業軍人を選んだわけだが、たとえ「軍神大舩」と讃えられようが、そこにはいつの時代にも変わらない母の願いが隙間見られた。

他方、戦時中の「母性の讃美は、犠牲、忍耐への讃美であり国家目的への奉仕であり、私的なものは後退させられた⁽⁶⁾」というように、個々の私的状況は無視され、国家の要請に応えようとする考え方があることも、また事実である。

次に大舩家の三女八重子さん（現姓は黒島、元小学校教諭）のインタビューを紹介しよう。

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

保坂 お兄さんがガダルカナル島にて戦死された時、黒島さんは与那国島で国民学校の訓導をされていたわけですが、松市さんの戦死を聞いてどんなお気持ちを持たれましたか。

黒島八重子 兄の戦死の知らせをうけた時、ちょうど姉の静枝が体調を崩し、台湾の病院に入院していました。この姉が前もって兄の夢を見たと言うんです。汽車に乗って「さよなら、さよなら」と行く夢を見たのだと言うんです。兄の戦死のことはそれから後になって聞いたのですが、その当時は、戦時中ということもあり身近なものとして死というものを考えてもみませんでした。それに、戦争に勝つか負けるかということばかり頭にあり、身内の死を悲しむなどの気持ちのゆとりはありませんでした。今になって考えてみますと、戦争というのは、職業軍人とか將軍とか、かっこいいことばかり頭にたたき込まれていましたから、歌でも歌うように戦意高揚の気持ちに犯されていたと思うんですが。

保坂 その後「軍神大舛」のご兄妹などと言われたかと思うのですが、どういうお気持ちでしたか。

黒島 軍神といっても人間なわけですから…。兄は、職業軍人であり、自分が死んだら赤飯を炊いて祝ってくれと言う言葉を残していたぐらいなわけでした。考えて見ますと、人間ですからいたらない点もたくさんあったと思うのですが。

保坂 いたらないというのは、お兄さんですか、それともご兄妹のことですか。

黒島 兄ですね。まだ、人間として完成していない。アメリカに対してもどのように考えていたのかと。そういう点につきましては、私も大変反省というか、内省しているわけです。軍神といわれても、それほど名誉なことだとは思っておりません。ただ、兄が若者の熱意でもって一生

懸命責務を果たしたという点では、兄を信じています。

ただ、人がいうように、軍神の妹である事について私の方もいささか抵抗がありますね。

保坂 お兄さんの戦死についてお母さんは何かおっしゃっていましたか。

黒島 この前聞きましたが、何か自分の子供がよくやった、という気持ちは母親として持っているようですよ。ただ、他の村人と同じように生産に励み、空襲から逃れて避難場所で身を守って暮していたので、悲しむゆとりなどなかったと思います。母は、最近死んだ子供のことや戦死した兄のことなど、口に出すようになりました。兄だけでなく、大勢の人が戦争で亡くなっていますから…。

保坂 戦時中、方々で大舩大尉の顕彰大会が開かれていますが、それには参加なされましたか。

黒島 参加していません。与那国島では、時々人が集まって戦況報告や、顕彰大会みたいなものがありました。その時には、父が大会にちょっと連れていかれて、上座なんか⁽⁷⁾に座られました。父は、人前で話なんかできる人ではなかったです。家に来てくださる方には、こうあまり口が上手ではないのですが、自分の哲学や生活の信条についてはよく話していました。もっともふだんは、あまり自分から口をきくことはありませんでした。沖縄本島の顕彰大会には、妹の清子が出たみたいです。

保坂 お兄さんの顕彰碑は、与那国島にあるのですか。

黒島 そうです。台湾で義兄が石（みかげ石）を購入してくれて、機械で碑文を彫りました。ただ、当時兄は2階級特進して少佐になったのか、それとも1階級だけの大尉なのかわからなかったのが、階級のところだけはつい最近まで空いておりました。

保坂 話は変わりますが、黒島さんの妹さんで戦争中沖縄師範女子部に

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

在学していました清子さんがいましたね。清子さんは沖縄戦で亡くなつたと聞いていますが、何かお考えを聞かせていただけませんか。⁽⁸⁾

黒島 沖縄戦の時、私は与那国島にいました。その時、私の夢ですが、妹はどうしているだろうかと心配で、私が人の集まっているところへ行くと、さっと話をやめるとか、船に乗って遠い所へ連れて行かれたとか、そういう夢ばかり見ていました。そんなわけでこれはひょっとしたら助かっているかとも思ったんです。それが凶星でした。戦後与那国に戻ってきた島出身の女学生に聞いたら、清子は死んだらしいというのです。

保坂 その後清子さんの遺骨拾いには行かれましたか。

黒島 はい。戦後ずいぶん遅くなりましたが、清子の友達の話や、西平一義先生からお手紙をもらっていたので、たぶんこちら辺りだろうと米須の海岸に行きました。でも、骨などあるはずもありませんでした…。他の人と一緒にどこかに片付けられていると思いますが。母は、自分の気持ちをなかなか言わない人で、こちらが外部から様子を見るだけですが、やっぱり夜は泣いていたみたいです。やっぱり娘なものですから…。

保坂 そういえば、お兄さんが軍神と新聞にでた直後、沖縄本島から一中の教師だった田端一村先生が、大舩家を訪ねていますが覚えていませんか。

黒島 はい。先生がいらして、兄から家族にきた手紙や、陸士在学中の日誌などを持っていかれました。写真も、家族の写真とか全部持って行きました。あの頃は与那国島には写真屋がないので、写真屋が島に来たとき写してもらったのですが、それっきり戻ってこなくて、それで家に写真はあまりないのですよ。

保坂 黒島さんは、最近小学校の教師を定年退職されたわけですが、1人の教師として戦争をどうお考えですか。

黒島 今まで戦争は遠いところでやられるものだという意識がありました。それが、こう身近に、少しでしたが島に艦砲射撃を受けたり、海軍の兵隊が弾にあたってふくれて死んでるのを見たりなどして、貧血を起こしたこともありました。そういう状態などをみまして、本当に戦争とは恐ろしいものだ、そして、死んだ後が本当に何のために死んだのかと。私は、当時勝つまではと教えられ、国のために死ぬことを教えられ、死とはどういうものか考えてもみませんでした。今になってみますと、子供達や大人達が自分の命を絶つというのは大変なことだと思います。教育のため、あの時は、これ一本しかなかったんじゃないかとも思います。捕虜になるよりは、死んだほうがいとみんな考えさせられていたものですから。教育によりみんなそうなり、特に若い人たちの判断力のない時の教育というものは恐ろしいものだと思います。

保坂 もし、今軍神を讃える運動が起き、再評価が始まったらどうされますか。これは、実際本土の方では、軍神の見直し運動が起こっているのですよ⁽⁹⁾。もちろん、戦争の評価ではなく、家族愛とか、自分の責任感を最後までやりきった人という意味でのもので、とくに学校現場でなされています。神社とはいかないまでも、その種の建物を作り、子供達に話を聞かせたりもしていますよ。

黒島 私の気持ちとしては今は軍神だなんて言ってほしくないですね。何だか、肩の荷が重い感じですね。未熟な人間が、ちょっと戦争で責任を果たしたから軍神なんて。

保坂 迷惑ですか。

黒島 その真面目さをもって下さる、讃えて下さるというのは、また別なんですけれども。それに、自分の部下をみんな戦地に引っぱって行って、死なせてしまい何が軍神かと陰口もきかれたといえます。

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

保坂 それは戦時中ですか、それとも戦後ですか。

黒島 いえ、あの当時です。自分の子供は無名で戦死された方の話らしいです。それも、もっともなことだと思います。同じく死んでいったのに、一方だけが軍神といわれると、親としてはたまらなかったのだと思いますよ。その辺の気持ちもよくわかるので、あまり騒いでほしくないのです。

保坂 松市さんの学校での成績や、寡黙な性格を知ると、平和な時代であれだけの才能があればすごかったにと思いますね。ただし、そういう人が、人の先頭にたち、戦場に行くわけですから、死というものは何か避けられない気がいたしますね。特に、松市さんは、歩兵部隊の中隊長なわけですね。この部隊は、いつも最前線に駆り出され、しかも隊長は戦闘をしながら部下を訓練していくわけですから、戦死して当然ということもありますね。

黒島 本当に同じように死んでいますから、他の人にたいして申し訳ないです。⁽¹⁰⁾

黒島さんとのインタビューを通して、いわゆる「軍神」の家族の悩みが戦死者を持つ家族となんら変わらないことがわかる。後日、資料の返却のため黒島家を訪ねたさい、インタビューで気になっていたことの2～3を尋ねてみた。それは、松市が戦死したという連絡がなされた時のご父母の反応である。

保坂 ご両親は、松市さんの戦死を聞いてどうでしたか。

黒島 松市は軍隊にいましたから親は覚悟はしていたと思います。母は、あまり自分を出すような人じゃなかったのも、あまり覚えがありません。自分の子供はこうだと自慢するような言葉は聞いたことがないし、悲し

いとか悔しいとかも聞いたことがない。父は、まっすぐな人間でした。兄が中学へ希望する頃から師範学校に入るよう説得しても聞き入れなかったので、その頃から覚悟はしていたと思います。父もあまり自分の気持ちを出すほうではなかったです。

保坂 黒島さん御自身は、その時どう思いましたか。

黒島 あの当時、私もみんなの盛んな気持ちに押されて、悲しいとかそういう気持ちはそれほど起こらなかった。一人で今静かに考えると、兄はどうやって死んだのだろうかと思う。ただ、当時は、戦争に勝つか負けるかとか、自分はどうなるのだろうか、そういうことばかり頭にあって…。

保坂 今となってはどうとでも言えるでしょうが、当時の気持ちとしてはそれが偽わざるお気持ちだったのでしょね。職業軍人を選んだのはお兄さんの選択でしょうけど、本人の性格や気性を考えると本当に残念ですね。ある意味で早く生まれすぎたのかもしれないですね。死ぬことのために生まれ、学問し、そして戦場であたかも必定の事実であるかのよう⁽¹⁾に死んでいく。残酷としか言い様がありませんね。

その後何回か黒島家を訪問したが、いつもご家族がにこやかに対応して下さった。話の途中で、よく田端教諭の話がでてきたが、大冢家が渡したという日誌、写真の行方は皆目見当がつかない。田端教諭が、与那国島で収集した資料を使い戦時中「大冢大尉伝」を地元の「沖縄新報」に136回にわたり掲載した小野重朗元一中教諭（現在鹿児島県に在住）に手紙を差し上げたが「（田端先生から借用した大冢家の）手帳は、田端先生にお返しいたしました」という返事があった。結局、黒島さんの「日記とか覚書の類のものすべて、田端先生に預ってもらったのですけど、残念ながら沖縄

沖繩戦と戦争動員

戦で先生と一緒になくなってしまった」というのが真実かも知れない。

ところで、この話の中に出てくる田端教諭とはどんな人だったのだろうか。今手元に『回想の田端一村』という著書がある。これは、沖繩戦で亡くなった田端教諭を追想し、その33回目の命日に同僚、教え子、家族が編んだ本である。これを元に田端教諭の人となりを見ると、次のようになる。

田端教諭は、1900（明治33）年9月、金武村字宜野座で出生している。1927（昭和2）年3月、国学院大学高等師範部を卒業し、同4年県立第一中学校の教諭となる。専門は国文学で1932年頃「沖繩国語研究会」を結成その指導にあたった。ところで、1935（昭和10）年頃、文部省は国民精神を作興するため、東京に国民精神文化研究所を開設、指導者の育成につとめた。沖繩県からは一中の田端教諭が選ばれ、1936（昭和11）年10月から半年間教育を受け、帰郷後は、県主催の国民学校の教師たち向けの国民精神作興講習会の講師を勤めた。

1943（昭和18）年10月、「軍神大舛」の誕生に伴い田端教諭は、インタビューに出てくるように与那国島の大舛家を訪問、資料の収集にあたった。同教諭は、さらに1943年の12月、東京にて大舛関係資料を集め、その時の内容を雑誌「沖繩教育」（昭和19年2月号）に発表している。田端教諭は、その後国民総動員運動にそって戦意高揚のため県下の各学校、団体をまわり時局講演会活動を盛んに行った。

さらに1944（昭和19）年10月、県立一中を休職、大政翼賛会沖繩支部に勤めた。そこでは主に、県民全体の士気高揚と精神作興の仕事に従事し、戦時下の住民対策、民衆指導、指揮に当たった。沖繩戦のさなかには、沖繩師範学校の鉄血勤皇隊（千早隊）を掌握し、情報宣伝活動に従事した。そして、ついに1945（昭和20）年6月、沖繩本島南部にて死亡した。⁽¹²⁾

こうした経歴を述べるだけでも、田端教師は、沖繩戦直前の集団的狂気

ともいうべき時代に、文字通り寝食を忘れ時局に協力し、ついに戦争という非常な状況下で亡くなったといえる。

沖繩戦を、人の指導という観点からとらえると、そこには時代を反映し、もしくは先どりしていた者がいることがわかる。こうした指導者が戦時非常時に公然たる影響力もち、しかも教育や地方政治の分野で力を発揮し、結果的に根こそぎ民衆を動員する号令者に化してしまったことは否めない。

戦後奇跡的に一命をとりとめた指導者たちは、こうした戦前における民衆指導の有りようをどう考えたのだろうか。一人の人間の生き方として大変興味のある問題だ。

この一つの例証として、次に戦時中沖繩の言論に関わった新聞人の「軍神大舛」と戦時報道、さらには戦後の歩みについて述べてみたい。

二 戦時下新聞人の歩み

初めに、「朝日新聞」の沖繩担当記者であった上間正諭氏（元沖繩タイムス社長）の証言を紹介しよう。

保坂 戦時中上間さんは、「軍神大舛」運動を直接取材したと伺っておりますが間違いありませんか。

上間 そうです。

保坂 大舛中尉は、上間に達して軍神といわれるわけですが、なぜ軍神になったのか上間さんはどう考えられますか。

上間 おそらく2階級特進があったからだと思いますよ。2階級特進と言うのは、戦場において抜群な功績があったということですよ⁽¹³⁾ね。だからそのことが軍神を作りあげたのではないのでしょうか。昔肉弾三勇士と

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

というのがありましたね。あれは事実とは違っていたのですが、そんなことはちっとも疑問には感じていなかったでしょう。あの当時は、みんな立派なことをしたぐらいしか思わない。だから、大舩大尉が2階級特進しただけで、戦場でどんなことをしたか詳しいことはわからなくても、これは立派な軍人さんだということになったと思いますよ。

保坂 気になるのは、彼は沖縄出身で、軍神と新聞で書かれてすぐ後に日本軍、第32軍が沖縄に派遣されるわけですが、それとは何か関係ありませんでしょうか。

上間 うーん、そこらあたりはどうもね。そういえば、大舩さんを教えた方は一中の田端先生ですよ。あの方は、ずいぶんそれをほめていましたよ。小説は、小野先生が書かれたが、田端先生が書いたもので実録めいたものがありました⁽⁴⁾。とにかく大舩の戦功は抜群だったというわけです。僕らは新聞記者なわけで、それに付随するような話、例えば大舩大尉を1つのモデルにして戦意高揚を行うのが新聞記者に与えられた使命であるという錯覚をもち、書いたと思います。戦時中に、戦争反対といえる人は、新聞記者を辞めているわけです。桐生悠々なんかもね。私どもの戦争は一方的な状況でした。太陽のもとで日光浴もできない。だから私なんか何も要らない、太陽の光と空気さえあればいいんだと、変につきつめた気持ちを持ちました。水だけでも人はいくらか生きていけるし、日光さえあればいいと暗い壕の中でしゃがんでばかりいて考えていましたよ。側では爆弾が破裂するは、いつ死ぬかわからない状況ですからね。その時は、もう戦争なんてどこが勝ってもいい、自分とは関係ないと、そうなりきっていました。もっともその前半までは、朝日と毎日新聞はライバルだった。僕たちは、「毎日」には負けてはならん、という先輩方の教えがありました。ところが、昭和19年11月、豊平

さんが「沖縄新報」にとられることになり、その後任に台湾にいた宗貞利登さんが那覇支局長で6月に来ていたわけです。ところが、10月10日の10・10空襲でビルが破壊されてしまった。それで、宗貞さんは、戦時支局の再建のため九州に戻ってしまいました。残されたのは僕1人だけです。帰ってから全然連絡がないのですよ。昭和20年2月の11日、今でも覚えています、情報将校の葉丸（兼教、陸軍参謀）が、今の県立芸大、以前の師範学校があったところに第32軍の本部があったのですが、彼から召集がかかったのです。そこで、アメリカの海兵隊が沖縄に向かっていくというのを聞かされたわけです。マリーーンが来れば上陸するし、当然陸上での戦闘があるに違いない。それは当然記事になる。「毎日」は、野村（勇三）さんという支局長の外にも職員がおり、僕は1人きりなもので、もし状況判断を誤って「毎日」に大きな差をつけられたらどうしようかと考えました。それで、宗貞さんに、「早く帰って下さい」と電報を打ちました。それで新聞記者1人とカメラマンの3人でやって来ました。結局宗貞さんは、戦死してしまいました。

保坂 ところで話は元に戻りますが、大舛さんの関係では、どんな取材をされましたか。

上間 あまりおぼえていないのですが…。

そういえば与那国島の出身でつくっている宇良部会の取材はしましたよ。中学4年生や5年生、島の出身だけの少年5、6人ぐらい下宿していました。そこを僕が訪問して、話を聞きました。あの当時の少年向けの標語が、部屋にいっぱい書いてありましたね。

保坂 大舛さんのご家族に会いましたか。

上間 大舛さんには、妹さんで清子さんがいましたね。この方だけは、覚えています。最初僕が取材に、首里の彼女の下宿を訪ねたとき、軍神

の兄弟だからさぞかし勇しくお兄さんの戦功を誇りにおもって話すとおもったのですが。会うと、案外優しく、好ましく感じのよい少女でした。こちらが尋ねても返ってくる言葉は、非常に少なく、むしろ書いてくれないほうがいいという感じがしました。ちょっと意表を衝かれ、がっかりしました。しかし、記事は彼女の言葉を曲げて、言葉の端々も取り入れて、彼女の本心でないようなことを記事にしたと、今になって思います。何ととっても、頭にあるのは蟬の声ですからね。

保坂 当時の沖縄県会は、大外精神を讃える特別決議はしていませんか。

上間 具体的には覚えていません。ただ、現在の言葉でいえば、一種のフィバーですからね。

保坂 上間さん、当時の新聞検閲はどういう順序ですのですか。

上間 県紙の場合には、県庁内の特高がやるのでしょうか、僕らの場合は、電報で本土に知らせるわけだから、むこうの方でやっていたと思います。ただ、戦争になると本土に連絡する場合、軍の機械を使うわけだから、当然参謀本部の判子がなくてはタイプを打ってくれないわけです。

保坂 ところで上間さんが、新聞社に入られた動機はなんですか。

上間 最初僕は通信省、今の郵政省でしょうか、そこを受験したのです。それは、九州に一つだけあって全国でも六つしかない電信技師の養成所でした。おそらく沖縄から百人ぐらい受験したのですが、入ったのは一人だけでした。次に金のかからん方法で学校を出る方法はないかと考えていたとき、父が、友人である「沖縄朝日新聞」の社長の当真嗣合さんに「この子はブラブラしているから使ってくれないか」と頼んだら、「そんならしばらくここに入っておきなさい」といって昭和14年に沖縄朝日に入ったのですよ。そのとき、豊平（良頭）さんは「朝日新聞」に移っていました。豊平さんは、沖縄朝日は自分の古巣だから、毎日のよ

うに沖縄朝日に来ていました。僕らも毎日のように挨拶をしていました
がそのうち「君、来ないか」といわれ「朝日」に呼び込まれたわけです。
それからずっと豊平さんとつき合っています。人間が、人間にある影
響を与えるのは、大変なことですね。僕は豊平さんから人間的な影響、
教育というようなものを受けました。ちょっと表現はおかしいかもしれ
ないが、親鳥は、雛を羽の下に入れてかわいがって育てますね。ああいっ
た感じで僕は、羽のなかでぬくぬくと育てられた感じで、いまもその気
が抜けません⁽¹⁵⁾。

保坂 戦時中の取材でなにか記憶の残るものはありませんか。

上間 私が、慚愧にたえないのは、取材の方法ですね。戦争の前半の頃
は、戦死広報が入ると、遺族を訪ね、自分の子供は小さいころから親思
いで、ちょっと変わったところもありましたよと母親から聞き出すわけ
です。今でも覚えているが、本部町に健堅という部落がありました。僕は、
戦死広報を沖縄連隊司令部でみまして、そこを訪ねました。「実はあな
たの息子さんは、立派な戦死をされました」といったら「何をいうか。
そんな汚らわしいことをいうな、帰れ」と母親に言われたわけです……。

保坂 母親は、息子さんの死を事前に知っていたのですか。

上間 いや、知らない。「自分の息子に限って死ぬわけがない、あんた
なんかは、何でこんな不吉なことを、うそをつくか」というんですね。
これでは、もう取材にも何にもならないわけで。「お母さん、実はこう
ですよ、ああですよ」といって話に入り、写真を借りるわけです。1、
2枚でいいのですが、必要以上に借りる。後で写真を入れて記事を書く
のですが、銃後の母は、涙一つ流しませんでした、という格好で書くの
です。真実の報道どころか、まったくの捏造でした。それによって戦意
が高揚すればいいと本当に錯覚していたのです。何かものの化にとりつ

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

かれたように、マラソンでみんなが走っているものだから、自分も走り、もっと前のほうにいかうなんて思ったりしまして。戦争が終わって、アッと思った次第です。この戦争で、僕は子供二人、両親、弟、妹を失ったんです。家内が生きているのがわかったのは、捕虜になって一週間たってからです。友達が「君の家内、今日病院で合ったよ、こっちのところが撃たれ病院に通院しているよ」というんです。僕は、その日、病院でずっと妻を待っていたのです。そしたら、むこうから、杖を突きながらよぼよぼと来るわけです。そこで、初めて生きていることがわかったのです。そんな状況で、戦争中おかした新聞人としての罪というのか、子供や両親を亡くしたこともあって生きているのがいいのか、死んだほうがいいのかを一、二ヶ月考えていました。

保坂 ペンは持ちたくないということですか。

上間 ペンを持ちたくないというより、人の表面には出たくないということです。それで軍作業の中で、ウォータープールというのがあって、僕はそこのグリスマン（油係り—筆者注）一番最低の仕事でしょうが、それを半年ほどしました。その後、豊平さんが宜野座にすることがわかり、僕は会いに行ったわけです。僕らは、松の根っこのところで、始めてゆっくり話しました。「僕はこんなわけで非常に悩んでいます」といったら、豊平さんは「よろしい、死ぬんなら死んでもいいが、今はちょっと待て。今は何も考えずにただ生きなさい。ちょうどトンネルの中に入っているようなもので、トンネルを抜けてそれでもなおかつ死ぬべきだという時に、あなたは死になさい」と。豊平さんは、そんな人でした。「ああそうですか」といってその場を離れ、後は本当に静かにしていました。人の目に触れるのも避けて。いよいよ僕らは自分の生まれた首里に帰ることになりました。僕らはそこで農耕作業といってイモ掘を一週間か二

週間やったわけです。そのあと、豊平さんと文化部を作り、真っ先に博物館の再建にとりかかったのです。廃墟の中に散在している文化財の残欠を集めるのが仕事でした。そういえば冊封使がもってきたもので、林麟焜の偏額がありました。それを家の台所の棚に使っている人がいました。僕らは、これは大切なものだから、とってかわりの板をもってきたり、着物、かすりですが、これなども集めました。僕はこれ以外にも、20歳前後の若い娘さんを集め、あかゆら合唱団というのを作りました。この子たちは、軍作業にあって、生活がなにかしらだらしなくしているように感じたもので、この連中に何か希望をあたえようということで、一中の音楽の先生をしていた仲本朝儀さんにリーダーを頼み、僕は一軒一軒まわり、女の子を集めました。事務局長だったものですから。現在の首里高校の広っぱの片隅に集まって練習しました。楽器もなにもないわけですが、10か月ほどしまして、発表会をしました。その後、首里芸能文化連盟をつくり、古典舞踊の復興や、組踊りなどもやりました。現在「沖縄タイムス」が行っている「沖展」の原型は、そこで生まれたものです。

保坂 1人でよかったんですね、首里に戦後すぐに戻った人が、文化に目をつけてそれをなんとか残そうと運動をした。元の王城があったところですから、それだけ今になって考えると価値が高いということでしょうね。⁽¹⁶⁾

上間さんは、1947年戦前の新聞人たちが発刊した「沖縄タイムス」の創刊に加わり、1980年社長職を定年で辞したあとは、平和運動に関わっている。その温厚な人柄、確固とした平和観は、多くの人の賛同を得ている。上間さんの戦場体験と、その後の言論活動については、御本人の書物等で

沖繩戦と戦争動員

窺い知ることが出来るが、言葉の奥深いところでは他人の誰をも介入させない重厚さがうかがわれる。上間さんは、ある雑誌の求めに応じて沖繩戦と自己の体験を次のように述べている。

無数の難民の一人となって首里を離れて以来、正直いって新聞記者としての職業意識などいつしか吹き飛んでいた。目前に、老人や子ども、若い母親や幼い乳飲み子たち、または少年少女たちが、無残に殺されていく、言うに耐えないむごたらしい光景を幾度も目撃したけれども、今となってこれを戦場の体験としてこれ以上語ろうとする場合、なかなか言葉となって出てこない。体内を流れる温かい血が、皮膚のどこかを破って流れ出した時、空気につれて凝固作用をおこすように、あの戦場における体験も、言葉となって外気にふれると、とたんに冷たく凍えて、生々しい本来の意味を失う気がしてならないのである。⁽¹⁷⁾

これは、沖繩戦における自分の体験に言及した箇所での発言であるが、いざ説明をするとすると「言葉が凍る」と、大変重い言葉を発している。反面、戦争体験者の減少と戦争継承の風化が叫ばれて久しいが、それらは「血から血へと受け継がれる」もので、決して留まるものではない、という言論人の強い意志が感じられた。

次に同じく戦時中、新聞記者として戦場を彷徨した元「沖繩新報」記者の仲本政基氏の証言を聞いてみよう。

仲本氏は、1919（大正8）年6月25日、那覇市字東町にて父政篤、母おとの三男として生まれた。天妃尋常小学校を卒業し、1932年4月沖繩県立第二中学校に入学する。1937年同校を卒業し、進学のため上京、明治大学専門部（文芸学科）に学び、「学徒動員令」の公布（1942年1月）にともな

い1942年9月繰上げ卒業となる。その年の12月結婚のため帰郷、正子さんと結婚する。翌年3月、沖縄県庁の水産課に奉職するが、当時「朝日新聞」記者であった豊平良顕氏の斡旋で「沖縄新報」に入社（1943年10月）することになった。

仲本氏は、入社後直ちに教育担当の記者に配置され、その最初の仕事が「軍神大舩」に関するものだったという。

保坂 昭和18年の10月入社ですが、この時は、大舩顕彰大会や演説大会等、県内では多くの「軍神」運動が展開されていますが、そのなかで覚えていることがありましたら教えて下さい。

仲本 私が「沖縄新報」に入社したのは、昭和18年10月15日ですから、「軍神大舩」の記事は、すでに出ていたわけです（筆者注－「軍神大舩」の最初の公表は10月8日）。それは、主に首里担当であった牧港篤三さんが書いたと思います。私が取材したのはちょっと後からだと思います。

保坂 初めにお伺いしたいのは、なぜ多くの戦死者のうち大舩大尉が上聞に達したかということですが、仲本さんはどうお考えになりますか。

仲本 そうですね、沖縄については軍の配慮があったからではないでしょうか。国内の状況があまり思わしくなく、当然軍では沖縄の強化を考えていたはずですよ。それで、沖縄から軍神を出そうという気持ちがあったのではないのでしょうか。私の同期生に川村一夫君というのがいました。彼は、大和人（やまとんちゅう）ですが、県立二中を出て、大舩さんと同じく陸士を出ています。彼もガダルカナル島で戦死しましたが、かれの場合は単なる戦死ですよ。沖縄で、慰霊祭はやりましたけど(18)ね。

保坂 川村さんの階級は何でしたか。

仲本 同じでした（筆者注意－中尉）。大舩さんとは、年も1つか2つ

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

しか違わなかったはずですよ。

保坂 話は変わりますが、当時の新聞検閲で覚えていることがあったら、お話し願えませんか。

仲本 記事を書くとき整理部にまわりますよね。整理部はそれを一まとめに工場へ送ります。工場で、文選工が植字を行って版を作り、ゲラを刷るわけです。そのゲラを、沖縄県庁内にあった特高に持っていきます。警察部長が特高のトップで、その中に特高課というのがありました。ゲラがで上がるのは、夜の12時頃ですが、それを少年が持って行って、特高がOKすると、持ち帰り印刷するのです。もし特高が、検閲でだめだといったら、さっそく組替えをするのです。

保坂 検閲の基準は、もちろんあるわけですね。⁽¹⁹⁾

仲本 あるとおもいますが、私は新聞社に入ったばかりで、よくわかりませんが。

保坂 係の特高は何人いましたか。

仲本 複数で、当直をおいて当番制でやっていました。

保坂 話は変わりますが、沖縄戦当時読物としては、「沖縄新報」しかないわけですが、その時新聞記者としてどういう気持ちで記事を書いていましたか。

仲本 とりたてて何かの気持ちを持って書いたということはないですよ。新聞記者である以上何かを書かねばならないわけですから。ただ、一県一紙だったのでのんびりはしていました。ただ、戦局が日々切迫し、緊張感が高まるにつれ、なにかしら戦争に追まぐられ、一種の熱病みたいな感じもしてきました。僕の場合、入社してまもないので編集長の豊平良顕さんには大変お世話になりました。僕たちが取材する前に豊平さんは、自分でもしているのですよ。豊平さんは、ちゃんと自分のメモに

とってあるから、僕が今日はなにも記事がありませんでした、という「おまえここに座れ」といって「こういうのがなかったか」というわけです。それで、豊平さんが言ったことを書くと、ちゃんとした新聞記事になるのです。そのほかには、戦力増強についての記事のねらいや書き方など、細かい点まで指導してくれ、僕らは助かりました。いま考えたらワンパターンでしょうが、戦争一色でしたからね。豊平さんが世の中はこうだぞ、と鋳型を指示しこれを僕らが記事にするというようなことでした。

保坂 大まかのことはわかりましたが、仲本さんが書いたものをよんで、ちょっとわからないことがあるものですから質問したいのですが。「沖縄新報」の人々が、5月に首里の地下壕を撤退しますが、その時日本軍のいる喜屋武半島ではなく知念半島に行きますが、その指示はどこから出ていたのですか。

仲本 知念半島が非戦闘地域であることは、軍も警察も知っていたわけです。僕たちが南部に下がって与座についたとき（5月の半ば—筆者注）そこにあった糸満市の壕の中で、警察、軍、市とが避難について話し合ったわけです。そこで、「住民は知念地域に行きなさい」という指示がされました。それを僕たちは聞いてきて、それじゃみんな知念に逃ようではないかといって、移動したわけです。

保坂 指示を出したのは軍ですか、警察ですか。

仲本 天宮（巽）中將が指揮する第24師団で、山部隊といわれていた部隊です。その時は、もう山部隊しか残っていなかったですよ。

保坂 それでは、第24師団の司令部が命令を出したわけですか。

仲本 そうです。第32軍の司令部が出したものではありません。もちろんその連絡は周知徹底していたものではありません。むしろ住民たちは、軍

のいるほうが安全と思っていたわけでした。新聞社は、知っていて得をしたわけです。あの状況の中でも、情報は正しくつかんでいたわけですから。ただ、知念に行けなかった仲間は、皆苦勞していますよ。

保坂 それはどうしてですか。

仲本 人間の運命みたいなものですよ。知念に下がる途中、大山一雄氏と稲嶺盛国氏と僕の3人は、食糧調達のため、大城森の県庁壕まで行くことになりました。米を運ぶつもりでしたが、アメリカの砲撃のため行けなくて、また与座まで戻ってきました。ところが、仲間は既に出発したらしくだれもいないのです。それで、僕たち3人は、知念半島に向い、着いたのが6月初めでした。ところで、先発隊は、湊川までは行っらしいのですが、あっちこちで艦砲射撃があり、また引き返して摩文仁に行っったわけです。島尻の南ですね。僕らは、知念に着いたものの、誰もいなくて、どうしたんだろうと心配になりました。⁽²⁰⁾

保坂 首里の壕を出るときは、何人ぐらいたったのですか。

仲本 社員と家族を入れて14、5人ですね。それに、師範学校の神島先生もいました。

保坂 仲本さん、米軍に捕まる時の状況は、どんなだったのですか。

仲本 僕たち3人は、知念村では、村長の親川栄治郎さんの紹介で、役所の壕にはいりました。もっとも壕といたって岩と岩の間にあるもので、そこにナベ・カマ持ち込んでいたわけです。今の知念村知念の上のほうです。ただ、この場所には米兵が来るもんだから、僕らは自分で穴探して、そこで寝泊まりしました。それがちょうど6月10日でした。この日、知念村の人が、僕らの壕にきて、「今日は米兵が、壕探しやっているから逃げよう」と言うんですよ。ところが、私の方は、前の晩ね、お腹こわして立ってられないわけです。それで、知念村の人と一緒にそこに残

ることになりました。

保坂 知念村の人は、どうして残るといったのですか。

仲本 わかりません。この人は、村の出身で、県庁の人だったらしいです。彼も残るといっているので心強く、「身を屈んでおこうや、ここが死に場所だ。ひょっとしたらここで死んでいるかも知れないから、後で覗いてくれ」といって2人と別れました。そしたら、何時間しても米兵はこないのですよ。それで、こちらは、ガケをはい上がって岩の間にいました。それから下の入り口で靴の音がするもので、てっきり大山さんたちかと思って起き上がって見たら、米兵なわけです。手を上げたんです。後、下に降ろされてとうとう捕虜⁽²¹⁾になりました。

仲本氏は、戦後そのまま知念村に滞在し、米軍政府の職員として働いた。そして、1948年5月、戦前の新聞人たちが発刊した「沖縄タイムス」の創刊に参加した。戦前の新聞人として再度新聞作りに挑戦するわけだが、そのことについては次のように答えている。

保坂 首里の壕を撤退する時、仲間とはまた新聞を作ろうと考えていたのですか。

仲本 いや、その時は「また会おうな」で、全然希望もありませんでした。「また平和になったら新聞作ろうな」と別れたわけです。しかし、生きるか死ぬかわからないので、新聞が作れるなんて想像もしなかったです。戦争中は、平和なんか真っ暗ですから、穴に入ったようなものです。それが、6月23日に艦砲射撃がピタッと止んで、誰からともなく戦争は終わったと広まり、やっと希望らしきものが出てきました。何か生活というものを考えねばならないとも。地元の新聞が、平和について

沖繩戦と戦争動員

関心が高いのは、僕たちがこういう経験を身をもって体験したからですよ。

仲本氏の発言の随所に、戦争に対する深い反省と、平和にたいする強い信念が感じられた。それだけ、強く激しく戦場で言論・報道のありかたを体験したということであり、昨今の表皮的な言論状況には、厳しい目を持っているのだらうと推察された。

次に、同じく戦時中の新聞「沖繩新報」の記者として参加し、戦後は言論人、詩人さらに平和運動家として知られる牧港篤三氏の証言を紹介しよう。

ちなみに牧港氏は、1912（大正元）年9月、那覇市久米にて出生した。その後沖繩工芸学校を卒業し、当時「沖繩朝日新聞」編集長であった高嶺朝光氏の紹介で同紙に入社した。1940年12月、新聞統合で「沖繩新報」に移り、主に首里市、教育畑を担当した。ところで、牧港氏は、1944年「軍報道班員」として、新設まもない第32軍に徴用されている。沖繩戦では、報道班員として、「沖繩新報」に記事（軍関係、AP、UP、共同ニュース等）を配信する役割を負っていた。

保坂 牧港さんは、当時首里の担当とお聞きしましたが、大塚大尉について何か書かれた記憶はありますか。

牧港 書いたとは思いますが、自分がどの記事を書いたかは覚えていません。一中は自分の担当でしたが、昭和20年の1月には、もう穴（壕—筆者注）の中に入っておりちゃんとした状態ではなかった。

保坂 大塚大尉が軍神になったのが18年10月で、その後2か月して第32軍が来るわけですが、そこらあたりと軍神とは何か関係はありませんか。

牧港 戦争で亡くなりましたが、元「沖縄新報」の記者をしていた福地友珍さんが大舩大尉のことを沖縄芝居にするのだといって連隊区司令部の井口大佐に会ったということは聞いたことがあります。

保坂 大舩大尉のお母さんの話にも、大尉の芝居の話が出てきますが主役はどなたでしたか。

牧港 誰が主役かはわからないが、南洋デブというかたが出演しているのは覚えていますよ。芝居は、たしか与那原のほうでされたはずですよ。

保坂 芝居は標準語ですか、それとも沖縄方言でしたか。

牧港 多少方言も使ったかもしれないが、ほとんどは大和口だったでしょうね。ただ、あまり関心がなかったものですから、覚えていなくてね。

保坂 話は変わりますが、沖縄県会で大舩大尉について何か特別決議がされたことはありませんでしたか。⁽²²⁾

牧港 何回もあったと思いますよ。「大舩大尉に続け」という言葉があるくらいですから、当局はいくらでも利用するはずですよ。

保坂 軍サイドからこういう記事を書いてくれといったことはありましたか。

牧港 連隊区司令部の井口大佐が、大舩大尉に力こぶを入れていたのは知っていますが、具体的にはわかりません。

保坂 軍神運動に力を入れた方に小野重朗先生や、田端一村先生がいますが、どうしてだと思いますか。

牧港 不思議なのはどうして小野先生が、大舩大尉伝を書いたかですね。小野先生は、文学に関心があり、なぜこんなことを書いたか理解に苦しみますね。また、画家の大城暁也さんが、大舩大尉の絵（新聞連載の中の挿絵のこと一筆者注）などどうして書いたのですか。大城さんは、軍部などよくいう人ではなかったですよ。田端一村先生は、真面目で一徹

な方でした。壕の中で印刷した「沖繩新報」を彼が配ってくれました。県民の生活は既にくずれていましたから、新聞など読む人はいなかったと思うのですが。

保坂 当時の新聞検閲官で知っている方はいませんか。

牧港 一人でなく複数だったので覚えてはいないのですが。真面目に検閲していましたよ。何かと照合しながら、新聞のゲラをチェックしていました。もっとも、戦争が始まると皆散りぢりになってしまい、どこにもいなくなりましたよ。警察も解体しまして、特高もいなくなっていました。

保坂 牧港さんは、戦後一貫して平和運動に関わってきたわけですが、今の言論状況をどう見ますか。

牧港 再び戦争にでもなればおしまいですからね。若い人達が、何も知らないうちに戦争に巻き込まれていくのを見るのが忍びないです。もし、同じ状況になったらペンを折るしか方法はないでしょう⁽²³⁾。

牧港氏は、現在沖繩戦を伝える「1フィートの会」の重責をこなし、各種の平和運動の中心的指導者としても活躍されている。また、詩人としても著名で、多くの詩作を残している⁽²⁴⁾。詩人の目を通して語られる言葉は、確かに研ぎすさまれたものを感じる。

ところで、牧港氏との話の中でできた福地友珍氏については、後日ご子息の友一郎氏とお会いでき、インタビューをすることができた。それによると、福地友珍は、県立一中を卒業と同時に「沖繩朝日新聞」に入社している。1940年の新聞統合後は、「沖繩新報」に移り、特に文学に関心があったようだ。記者時代に徴兵にあい、そこを除隊したあとは新聞社には戻らず、中城龍のペンネームで、芝居の脚本書きになっている。1943年

に入ると、福地は「輝く瞳」「撃ちてしまむ」等を発表し、時局柄好評を得ている。さらに、福地は、当時与那原にあった伊良波劇団（座長は、伊良波尹吉）で、花形役者であった真喜志康忠を主役に「大舛大尉に続かむ」を上演し、好評を博した。戦時下の沖縄芝居は、国策遂行の一翼を担い、戦意高揚のための芝居を最低一つ、しかも標準語ですることが指示された。そのため、「慣れない大和口で、舌をかみつつ芝居をしたものである…。名優といわれた先輩の役者たちも大和口の芝居では手も足も出ず、舞台の片隅でオロオロしていたものである⁽⁸⁾」と真喜志康忠氏は述懐している。

この「大舛大尉に続かむ」は、人々の話題となり、県都那覇市の瀧原近くにあった「珊瑚座」において上演され、脚光を浴びた。

さて、福地は、昭和20年2月、戦雲急を告げる中、家族を疎開させるため宮崎県に渡り、沖縄への帰途その船が沖縄本島中部の残波岬沖にさしかかった時、日本軍が敷設した機雷に触れそのまま海に投げ出されてしまった。やがて遺体が、同月8日那覇市の若狭海岸に漂着し、それは家族によっても確認されている⁽⁹⁾。享年35歳であった。

ところで、「軍神大舛」を讃迎する動きは、演劇だけでなく、歌やポスター、集会等県下隈なく見られた。つぎに、各種の集会で人々は何を主張したのかをインタビュー、新聞資料をもとに再現してみよう。

三 大舛顕彰運動の参加者群像

大舛顕彰大会を県下で最初に催したのは、八重山学生会である。同会は、大舛と同じ出身生徒からなり、「大舛大尉遺烈顕彰大会」と銘打ち、1943（昭和18）年10月17日那覇市の昭和会館で集会を開いた。この大会には、同島出身の生徒10人が代表で決意表明をしている。その中の一人宮良長欣

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

氏（当時県立一中5年生）は、次のように語る。

保坂 昭和18年10月に那覇市で八重山郷友会と学生会主催の「大舩中尉遺烈顕彰大会」が開催されましたが、そのことで覚えていることがありましたら、お話し願えませんか。

宮良 那覇市の昭和会館で、大会がありました。その時は、師範の生徒や、水産学校の生徒が集まりました。

保坂 発表者の人選はどうやったのですか。

宮良 よく覚えていないのですが。あの当時沖縄から2階級特進したのは大舩中尉が初めてですよ。それで、話の内容は、部隊を率いて敵陣に突っ込み、壮烈な戦死を遂げた、郷里から出た軍神に続けというようなものでした。

保坂 大舩中尉は、結局1つしか階級は上がらなかったのですが、生徒には大きな刺激になったでしょうね。

宮良 沖縄県からストレートで士官学校へ行ったのは、当時としては珍しいことでした。軍人を養成するための刺激剤としての要素は十分あったでしょうね。陸士と海兵は、中学生の憧れの的でした。大舩大尉は、その意味で大変優秀な人でした。その優秀な人が花々しく死んだというのも「軍神大舩に続け」の材料になったのでしょう。今でいう一種のエリートだったのです。それらが、沖縄の生徒たちに戦意高揚を与える格好の材料になったのでしょうか。

保坂 昭和19年の3月から第32軍が沖縄に入ってきますが、それと「軍神大舩」とは関係ありませんでしたか。

宮良 その辺りのことは、あまり印象にありませんね。軍のほうでもあまりPRはしていませんですよ、これは秘密にされていたものですから。

保坂 確かに新聞などを読みますと、軍よりも新聞や教育関係者が「軍神大舛」に熱心なことがわかります。そういえば、沖繩戦の緒戦に慶良間沖に遊弋しているアメリカの艦船に突入した伊舎堂大尉がいましたね。あの方は、軍神とはいいませんでしたよね。⁽²⁷⁾

宮良 伊舎堂大尉の場合は、戦争がそうとう追いつめられている時でしたから、とりたてて軍神と言うことはなかったです。しかし、彼が戦死したことはショックでした。大舛さんが、軍神といわれた時は戦争が始まったばかりで、ある意味で目立ちすぎたかもしれませんね。

保坂 緒戦の敗北と、生徒達の憧れの経歴の持ち主ということも重なったのでしょうか。

宮良 そのため、かなり脚色されたようですね。⁽²⁸⁾

宮良長欣氏は、1944年3月、一中を卒業後八重山に戻り、その後すぐに現地で徴兵され、戦時中は陸軍兵士として戦争を体験した。戦後は、地元の新聞社に入り、以後「沖繩タイムス」の記者（1951年－1965年）を経て、南方同胞援護会、沖繩海洋博覧会等に奉職し、1977年再び八重山に戻り「八重山日報」というローカル新聞の社長をされている。学問への情熱が人一番高かったが、戦争でその思いも断たれたと述懐する。

ところで、1943年10月、宮良氏が昭和会館で意見発表した内容が「毎日新聞」沖繩版に掲載されているのが、インタビュー実施後明らかになった。それには、次のように載っている。

「塵と散りける大舛大尉 撃つべし、撃つべし、撃たずみは断じて止まず 嗚呼わが兄と思ひし大尉 神の子か一神に続かん 大尉に続かん これ現在の否未来へのわれわれの信仰であり、また精神でもあります。言

沖繩戦と戦争動員

をまたずに正に蹶起の時であり自己滅却の秋であります。このとき大舩大尉の武烈がわれわれの脳裏に強く釘づけられ、果敢な勇猛心と強き敵愾心はわれわれの胸中焔となって燃えはじめたのであります。昭和18年1月13日こそ新しき歴史を作った大いなる朝でありました。何人も夢想だにしなかった万里の波濤を越え、はるけき敵根拠地の孤島において長期において数十倍の敵に対して毫も屈することを知らず、却って撃滅せざんば止まぬ大尉の偉功は讃ふべく余りに壮絶な敢闘おほみいくさ、その名に恥ぢぬ皇国の強者が持つ魂の崇高さはかく南海の孤島の余すことなく照らし出されたのであります。万里の彼方に絢爛と咲き出た尽忠の花は郷土沖繩のみならず全国に、否東亜の天地に燦然と薫ったのであります。われわれは今大いなる感激につつまれています。形容の出来ぬ感激それは来るべきものがわれわれの眼前に躍如として現れ、われわれに強くしっかりと脈うっている感激でもあります。飽くなき侵略の企図を正義人道の仮面にかくして絶えず帝国の存亡を脅かし続けた米英、ひとり皇国のみがなし得る“自衛のための戦い”はわれわれの父が、兄が、弟が御盾と蕨然起つてただ勝利のために練鍛えた力を存分に揮ふべき秋がまさに到来したのであります。(中略)

諸君、肉弾をもって軍刀を振り突進する忠烈大尉の面影の尊さを感謝といひ感激といふもおろかであります。ただ打ち臥して熱き涙もて拝むよりほか如何なる術もしらぬのであります。われわれの血管には、五体には、脈々として大尉の血が流れています。大尉に続くわれわれは、大尉の論しを汲み学びつつ戦ねばなりません。われわれ一中生は、一中魂に精進せんことを神に誓ひました。断呼(ママ)として莫進して行き、しかして微笑んで天皇陛下の御ために死んで行く、これが一中魂であります。良き歴史と伝統に培はれた魂は、遂に大尉を産みました。いまや大尉に続かん一千の魂は白亜の学園に満ち溢れています。

花が咲いた。日本の国の象徴である桜の花がいま東亜の天地に絢爛として咲き薫っているのであります。嗚呼敵地に肉弾をもって敢行、莞爾と微笑んで散った大尉の聖なる姿を、姿を。嗚呼大洋の彼方に神となられた大尉の忠心にわれら後輩は新たなる決意をもって大尉に固く誓はねばなりません。あの日、あの時の教しへを永久の鑑として、われらの心として勝利への精進を固く固く誓ひます。⁽²⁹⁾

この日の顕彰大会では、男女合わせて10人の生徒が意見発表を行ったが、その中で唯一の女性として演壇に立った井上（旧姓は新里）愛子さんの主張を次に述べてみよう。井上さんは、当時県立第一高女4年在学中で、同郷の糸数明先生（物理・科学担当）から「度胸をつけたらどうか」と言われ参加することに決めたという。事前に原稿を書き、大会当日それを読み上げたという。⁽³⁰⁾新聞に掲載された井上さんの意見は次のようなものであった。

無敵皇軍の尊き鮮血で彩られた南西太平洋の一孤島で十数倍の敵の重圧下にも屈せず、敢然塚台付近の陣地を占領し七十日にわたって占領地を確保したばかりか進んで敵陣を攻撃攪乱し昭和18年1月13日には味方陣地も大破して死傷者続出自らは重傷を負うたが全弾を撃ち尽くすや猛然十数名の部下を指揮して逆襲し、壮烈な白兵戦を交えて華々しい戦死を遂げた大外松市大尉は今回畏くも武勲上聞に達し個人感状の榮譽に輝いたことは郷土沖繩の真骨頂を発揮したばかりでなく、敵米英を震撼させたものとして大いに私達の誇りとするものであります。

大外大尉と私は外戚関係にあり、大尉の生家とは半町も離れない近所ですありますが、私が大尉にお会ひしたのは昭和16年の夏出征前に4、5日帰郷した時であります。その前にも私の両親から大尉は小学校時代から中学

沖繩戦と戦争動員

時代にかけて殆ど首席で押し通した偉い人だと聞かされていましたが、お逢ひしてはじめて大尉の偉大な風格に接し、よい兄を持ったことを幸運に思ひました。あの無口で努力家の兄だから定めし立派な武勲をおたてにならうと思っている矢先今回の偉勲を聞いて感慨無量なものがございます。

私も女ではありますが、兄の不撓不屈の心を心として学業に精進し、兄の英霊に應へるべき次の決意を表明したいと思ひます。

決戦態勢下の今日においては戦場も銃後もみな第一線であります。私達ははやとすれば弛みがちな惰心に鞭打って“常に戦場にあり”の精神を以て第一線に起ち、第一線で働き、第一線に一日を送るといふ気持ちで如何なるところでもすべてが戦場の覚悟でなくてはなりません。大尉大尉の英霊もまた永久に戦場におられて、私達の戦場生活を御覧遊ばされていることと思ひます。今や日本全土が戦場であり一寸の地といへども皆戦場であります。

銃後国民もまた一人々々が決戦戦士としての覚悟をさらに新たにし、前線戦士の烈々たる闘魂を心の糧として私達も大尉大尉の大精神をうけつぎ、宿敵米英の女性に打勝つ決意を一層固めなければなりません。ただ決戦と勝利への前進あるのみです。今こそ決戦一億の同胞はその日その日の戦場必勝を期し、撃ちてしまむの一大決心を新たに大尉大尉の英霊について米英必滅の底力を発揮しなければなりません。私達も戦力増強の一戦士です。その手ゆるめば戦力にぶるの覚悟をさらに思ひ浮かべて英霊の御冥福を心からお祈りいたします。⁽³¹⁾

二人の意見発表に共通なものは、ストイックなまでの大尉賛歌であり、これはまた当時の県下の学校生徒に共通した心情であつただろうと思われる。男子が、皇のため一身を捧げようとするに対し、女子の場合は銃後の生

活を守るとともに、「撃ちてしまむ」の精神を共有することにより戦時下での自らのアイデンティティを保持しようとする。国民精神総動員運動の中であって、婦女子の動員が促進されたが、いまだ年端もいかぬ生徒を壇上に上げ、国家の理想を語らせ、さらに国防婦人部よろしく銃後の女性のあり方を提唱させる。確かに、時代の教育は病みに病んでいたのである。

四 八重山地区での「軍神大舩」運動と住民の戦争動員

さて次に、大舩賛迎運動が、大尉の出身地八重山諸島でどの様に展開されたかみてみよう。大舩大尉の郷里石垣町では、大尉の二周忌の1944（昭和19）年1月13日、登野城国民学校において青年団、女子青年団、少年団の代表15人を集め八重山青少年団主催、「海南時報」社後援による「軍神大舩大尉偉勲顕彰決意闡明青年大会」が開催された。この日の大会に大浜町（当時）を代表して田本信一氏が参加した。田本氏は、1919（大正8）年10月大浜町に生まれた。1939（昭和14）年青年学校本科3年在学中に招集され九州小倉の陸軍第14連隊に入った。その後部隊と共に南支作戦に従事、作戦中に負傷する。その後病気治療のため原隊に戻り、1943（昭和18）年7月満期除隊した。除隊後は、家業の農業を手伝う傍ら青年団活動に精出した。ちょうどこの直後に「軍神大舩」大尉賛迎運動が始まり、「弁論大会」が開催されることになった。田本氏が住む大浜町ではさっそく五か字部落の代表からなる選考会を開き、審査の結果田本氏が選ばれた。

保坂 確かこの日（1944年1月13日）は、石垣町で町民3千人が集まり「軍神大舩大尉慰霊祭」が記念運動場でありましたですね。その後午後

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

3時から登野城国民学校に於て「弁論大会」が開かれたわけですね。当日の大会には何人ぐらい聴衆が参加したのですか。

田本 非常に沢山の人が集まったはずですが、何人ぐらい参加したか覚えていません。私は、大浜町の代表として参加しました。当時大浜町は、前里、平得、大浜、宮良、白保の五つの字からなっており、それぞれの地域から代表者がでまして弁論大会をしました。そこで私が代表に選ばれたわけです。竹富青年団は大山正夫さん、石垣町からは大川分団の本盛茂さん、石垣分団の宮良昌英さんらでした。

保坂 弁論大会というからには、順位は決めたのですか。

田本 ええそうです。一人持ち時間5分で話したのです。確か、一位は本盛さん、二位が私で、三位が大山さんでした。誰が審査委員だが分からないが、おそらく青年学校の先生とか、新聞社の人たちだったと思います。

保坂 具体的に何を話されたか覚えていらっしゃいますか。

田本 よく覚えていないのですが。ただ、大舩大尉は、石垣では軍神であり、大変敬意は払いました。町民はほとんどが戦争に関心があり、大変熱気がありました。それで戦意高揚をはかるのを目的に大会があったとおもいます。当時の状況からすれば、戦死というのは一つの誇りですからね。しかも、その時の話を聞くと、大舩大尉は、本当の軍神ですよ。私達の考えでも軍神として敬意を表すような人物なんですよ。でも、そういった人たちも今となって考えてみればかわいそうで、申し訳ないといった感じがしますね。その人たちだけじゃなくて、特攻隊の人たちも軍神みたいに亡くなっているでしょう。

保坂 特攻隊では伊舎堂用久大尉がいましたね。彼も陸軍士官学校出身で、沖縄戦では特攻機の隊長として戦死しましたね。彼の場合、どうし

て県民の間では軍神にはならなかったのでしょうか。

田本 伊舎堂大尉が亡くなったときは、戦況が不利な時でした。その時はもう日本軍にとって闘うどころではなくなっていた。だんだんと、そういうことが無くなってきたのでしょうか。私達が、弁論大会をしていた時はまだ戦況はよかったかですから。大舩大尉が亡くなった時から、戦況は日本にとって不利になりました。それからはもうダダッとね。

保坂 戦後大舩大尉のことを話す機会がありますか。

田本 いえありません。今は、民主主義の時代ですからね。

保坂 戦争について人々が語らなくなったというのは、平和な社会になったということですかね。

田本 特攻隊というとその当時国のため命を捧げて空中で死ぬというようなもので、国民からは神様みたいに思われていました。しかし、戦争に負けて国がこういう結果になったものだから、こういった人達の死を大げさに誉めあげる風習がなくなってきたということじゃないでしょうか。今になって考えると、戦時下における教育が、アメリカなんかと比較するといかに劣っていたかつくづく感じさせられますね。今、昭和天皇に戦争責任があるとかなんとか言っていますが、なるほどないとは言えませんよね。天皇の下で戦争があったのだから。でも、戦争を起こしたかどうかとなるとわかりませんね。当時の軍国主義がね。

保坂 政治のシステム自体がそうならざるを得なかったと言うことですね。

田本 天皇といえども戦争を止めなさいとは言えない状況だったと思うんですよ。天皇でも、内閣でも、近衛文麿でも軍を押さえきれなかったんですから。代わって東条英機が出てきて軍人政治になってしまった。そんな中で昭和天皇も思うようにいかなかったというような感じだとお

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

もうのですよ。⁽³²⁾

田本氏とのインタビューは、最後には昭和天皇の戦争責任にまで及んでしまい、やや軌道を外れた感が無きにしてもあらずだが、後学のためと思い記録することにした。ちなみに、田本氏は、1944（昭和19）年2月八重山現地で召集され、除隊するまでの1年7か月余り軍務に就き、その間何度もマラリヤ禍で苦しんだ。1967年から現在の土木建設業を営み、八重山地区では優良企業として成功している。「軍神大舛」に関わる多くの関係者とのインタビューを行ったが、その中でも田本氏は人の大きさを感じさせる人であった。おそらくは、人の上に立つにふさわしい力量と、誰からも敬愛される人格の持ち主だからであろう。

最後に、同じく弁論大会に参加した竹富青年団代表の大山正夫氏の証言を紹介しよう。

大山氏は、1925（大正14）年竹富町で生まれた。1939（昭和14）年竹富尋常高等小学校を卒業、同青年学校に進み、44年本科を卒業する。戦後は、八重山工業株式会社を振り出しに、石垣市役所、竹富町役場に奉職、1985（昭和60）年同町役場を退職した。この間八重山郡体育協会会長として八重山郡の体育向上に務めるとともに、自らも陸上競技の現役選手として活躍している。瀟洒な性格の持ち主で、爽やかな弁舌と、機知に富む話術の持ち主でもある。大山氏には、竹富島にまつわる挿話や、自身の思い出をまとめた『昭和の竹富－誰か故郷を想わざる』という好著がある。本も、そのお人柄をそのまま文章にしたような感があり、ユーモアとペースが随所に見られ、大変楽しい本でもある。

保坂 大山さんは青年学校の御出身だそうですが、そこでは具体的にど

んなことを学んだのですか。

大山 青年学校は、尋常高等小学校を卒業した後に入り、本科3年、研究科2年となっていました。その前は、少年団といい尋常小学校3年生から高等科2年までぐらいでした。小学校では、夜になると教室が空くものだから、そこを使ってちゃんとした先生が教えてくれました。私達は皆働いて、それで土曜日とかに学校行って2時間ばかり勉強したのです。

保坂 先生は、どんな人達でしたか。

大山 先生は、元兵隊でね軍曹ぐらいになった人がなっていました。もっとも軍事教練は、その筋の専門家が教えていました。

保坂 ところで、大山さんはどうして大舩大尉の弁論大会に参加したのですか。

大山 どうして出たかはよくわからないが、確か原稿書いてそれを青年学校の先生に見てもらったわけです。それを職員の人なんかも直して覚えたわけです。弁論大会は、1人持ち時間5分で、少年団や女子青年団の人も参加し、聴衆者は9百人ぐらいいましたよ。

保坂 その時どういう事を話されたのですか。

大山 あまりよくわからんですよ。とにかく沖繩から初めて出た軍神でしょう。だから、青年学徒には、大舩大尉に続いて第二第三の大舩が沖繩県から出るように青少年に訴えたかったわけですよ。弁論大会が終わってから、与那国島で行われた村葬に行った覚えがありますよ。20人ぐらいが船に乗り与那国島に渡りました⁽³³⁾。

保坂 同行した人はどのような方でしたか。

大山 八重山支庁長や在郷軍人会、大政翼参会、それに青年団の代表らが行きました。まあ、いわば代表焼香ね。大舩大尉の墓は、芝生のきれ

沖繩戦と戦争動員

いなところがありましたよ。きれいだったという印象だけが残っております。もっとも与那国島では、演説はしませんでした。

保坂 ところで、大山さんの本の中に大外隊の歌が掲載されていますが、どこで覚えられましたか。

大山 青年学校に大外隊の楽譜がきてね、それでみんなで稽古しました。あの頃八重山の人みんな歌えました。青年団の者が歌うとですね、みんな耳で覚えてしまうわけです。普通の人、大外大尉に非常に関心が高く、またそれを歌わんと非国民ぐらいに思われるくらいだから。何しろ沖縄から初めての軍神でしょう。それだけ大きな存在だったわけですよ。その後すぐ兵隊に行ったのですが、大和から来た兵隊は私らに“大外とはどんな人かね”と聞くんですよ。それで、“与那国島の出身で、個人感状をもらって沖縄で初めての軍神ですよ”というによく分かったみたいでした。この関係で、“波にぼっかり浮く与那国の”という歌が隊内でもものすごく流行りましたよ。それがなかったら、与那国島なんか誰もわからなかったでしょう。

保坂 大外顕彰運動では、八重山郡はかなりなお金を献金していますが、これはどうやって出し合ったのですか。

大山 いや、私なんかは余り献金しなかったですよ。私の小学校時代、昭和8年かな、その時沖縄号作るってね、それで縄を結って売りましたよ。そのお金を献金に行って納めるわけですよ。大外さんの時はあまり強くはなかったですよ。あるいは、各青年団を通じて少し割当があったかもしれないが。しかし、わたしは、昭和18年5月から7月にかけて産業戦士で長崎に働きに行っていたし、19年の10月からは徴兵で軍隊に入ったわけだからよくはわからないですよ。⁽³⁰⁾

以上が、大山氏とのインタビューの内容だが、関係資料によれば、1944（昭和19）年早々「軍神大舩大尉に続け」をスローガンに県下一斉に軍用機献金運動が展開されたが、八重山郡の献金総額は7万円、その内与那国村だけでその約半分の3万3,000円を献金したという⁽⁸⁵⁾。献金は、これに留まるものでなく、これ以外にも軍事献金、軍事公債等人々は多くの経済的負担を強いられた。戦時下での質素な庶民の生活を考える時、人々は非常時下での節約・勤儉によりそれら費用を調達し、兵士や、国家に報いたといえる。もちろん、与那国島の場合に見られるよう身内から軍神が出たということが引金となり、より直接的に人々が戦争に熱く参加していく状況も、見おとしてはならない事である。

お わ り に

「軍神大舩」大尉に関わるインタビューは、関係者約20人ほどの人々になされたもので本論文に紹介したのはその約半分である。これらの人々との面談のなかから「軍神大舩」運動に関わった人々の実態に光を当てようとしたが、大半の人はその時の記憶も薄れ、民衆の戦争へののめり込みを明らかにするには時期が遅すぎた嫌いがある。ただし、本論文で紹介した人々は、ある意味で戦時中の表舞台で何らかの形で活躍した方か、もしくは人々の脚光を浴びた関係者であり、証言を記録しておく意義は十分あったと自負している。しかも、インタビューに応じて下さった方は、どの方も時代を強い意志で乗り越えられて来た感じがして、その言葉や態度に重厚さが感じられた。ここに紹介した人全てが、あたかも運命的な糸にでもつながれているかのような錯覚に度々かられた。

さて、沖縄戦に至る多くの証言をまとめてみると、そのほとんどのこと

沖繩戦と戦争動員

が平時では考えられない常識や考え方であったことである。その反面、赤裸々に語られた戦時のあり様は、時代精神を強く反映し、その人の心の軌跡をあるがまま伝える内容となっている。「軍神大舩」の御両親は、偉大な軍人を子息に持ったが、いつも寡黙そのものだったという。お二人の性格が本来寡黙であったということを差し引いてもその沈黙の重さを考えないわけにはいかない。「軍神大舩」を生んだ沖縄県にあって、高ぶる戦意高揚はやがて彼を「思想としてとらえよ」と声高に叫べさせたが、周りが熱狂し、興奮すればするほど御両親の寡黙さが重みをもってくる。「神」といわれる者もまた「人」の子であり、子を失った親の気持ちはいつの時代にも変わらないのだと信じたいものだ。

ところで、沖縄戦に至る民衆の戦争動員のあり様を考えると、改めて教育、言論機関さらに指導者の立場というものが重要であったことに気がつく。「軍神大舩」運動の直接の指導者は、県当局にあったが、それが県域に流布される過程で重要な働きをしたのは当時の新聞であり、教育現場にいた教師であり少国民がいつも動員の対象となった。いわゆる知識人と呼ばれる階層の人々が、知識と特権を鎧にまとい民衆に戦意高揚を煽る。常識としての政治や法理が既に失われていた状況にあって、こうした知識人は実に野蛮に「死の号礼者」となり小権力者然として人々の前に君臨する。ここから、いつの時代にあっても弱い立場のもの、さらに学徒が権力者の標的となり、犠牲にされてしまう。只救われるものがあるとしたら、ここに紹介した何人かの人達は、戦後一貫して平和のための運動をしたり、発言していることである。

戦前に於ける痛ましい歴史的事実の軌跡と、それに続く戦後の平和への証を糧に、どうか「軍神大舩」大尉が、普通の人となり安らかに眠って欲しいと願わざるを得ない。

脚 注

- (1) 「琉球大学法文学部紀要－社会学篇」第31号 1989年3月に掲載されている。
- (2) 「琉球大学法文学部紀要－社会学篇」第32号 1990年3月に掲載されている。
- (3) 大外ナサマさんがおっしゃった県葬とは、1944年7月13日那覇市奥武山公園運動場にて開催された「大外慰霊祭」のことをさす。
- (4) 大外大尉と同じくガダルカナル島で戦死し、天皇の上聞に達した若林東一大尉の場合、1944年4月14日に開催された村葬の日に天皇・皇后から「祭料」といわれる香典が届けられている。望月（旧姓 若林、「軍神若林」の妹にあたる）花子さんとのインタビューから。（1989年3月28日 山梨県南巨摩郡南部町にてインタビューを実施）
- (5) インタビューは、1988年7月17日に実施。
- (6) 遠藤元男「日本母性の特質」『家庭教育指導叢書』劉叢書房 1984年253ページ。
- (7) 1943年から同46年にかけて与那国島に滞在した元小学校教諭の那根亮氏は、『思い出の記』という回想録の中で、戦時中同地で行われた大外顕彰運動について次のように記している。「ガダルカナル島で武勲を立て、壮烈な戦死を遂げられた軍神と仰がれている与那国村出身大外大尉を偲んで毎月一回、日曜日の早朝祖納にある軍神大外の墓に詣でた。5年以上と職員で8キロの道を行進した。」（八重山印刷 1978年10月 48ページ）。
- (8) インタビューに出てきた清子さんは、当時16歳で沖縄師範学校女子部予科1年生であった。沖縄戦において本島南部で戦死しているが、1943

沖繩戦と戦争動員

(昭和18)年10月21日付の「毎日新聞」沖繩版に「神去りし兄」という手記を寄せている。「兄の戦死の知らせを受けました時はびっくりいたしました。夏休み中のことでしたが学園の戦闘配置で家に帰ることも出来なかったのに、この報せでちょっと淋しい思いでしたが、考へてみますと兄の戦地に立つ前の言葉が強く印象に残っているので、きっと名誉の戦死を遂げたに違ひないと思ひました。…お友達は、“惜しいですね”といて私を毎日のやうに慰めて下さるのでしたが、私は惜しいとは思ひません。私は、兄の名誉の戦死を嬉しく思っているのです。…新聞社の方のお知らせで大へんびっくり致しました。有難いといふ感謝の気持ちから喜びの涙がこみ上げて来て泣いてしまひました。他人から見た時は悲しくて泣いているとしか考へられなかったでせうが、悲しみもありましたが私はこれをおさへ、おさへて兄の戦死を喜んでおります。…師範学校に入った以上、将来は教育者として立つべきですから最後の最後まで頑張つてやり、私達に代わるべき、また兄の仇討をすることの出来る児童を養成いたしたい思います。私が男なら今直戦場に出て兄の仇討をしたいのですが、女性的身ではいくら願つても許されませんので私はこの銃後を固く固く守つて日本女性としての責務、戦ふ女性として御奉公を完うしたいと思ひます。」

この手記がはたして清子さんの自発的意志によってなされたものか、あるいは新聞社からの要求に応じてかどうかは不明だが、ある部分では忌憚ない心情が吐露されている。反面、「兄の戦死を喜んでいます」という言葉に表されるように軍国少女にありがちな思考が随所に散見される。時代背景を考慮に入れても、16歳の生徒の手記としては重く、せつないものが感じられる。

- (9) 鹿児島県では、学校現場で戦時教育の中心的役割を果たした奏安殿、武道館の神棚、二宮金次郎像が次々に復活している。（「朝日新聞」1989年9月2日参照）。
- (10) 1988年5月18日のインタビューより。
- (11) 1988年5月25日のインタビューより。
- (12) 真栄城玄裕編『回想の田端一村』真栄城玄裕 1977年参照。
- (13) 上聞者のうち二階級特進した者の数（太平洋戦争関係者のみ）

年度 陸海別	昭和17年	昭和18年	昭和19年	昭和20年	合計
陸軍	3	95	12	5	115
海軍	58	0	0	0	58
合計	61	95	12	5	173

注）二階級特進者の出典は、全国紙（朝日、毎日、読売の各新聞）による。また、集計処理のため、上聞奏達日までに二階級特進したもののみを計数した。

- (14) 田端教諭が著した実録めいた記録は、現在のところどういうものか判然としないが、おそらく同教諭が1943年11月に上京、それから12月迄の約30日間かけ大舩顕彰運動のための資料収集、関係者インタビューをしたことを指していると思われる。ちなみに、田端教諭は、関係者とのインタビューを「沖縄教育」（昭和19年2月号 第328号 大舩特集号 沖縄県教育会発行）に掲載している。
- (15) 豊平良顕氏（1904.11－1990.1）のこと。沖縄県立一中中退。1919年文検に合格。小学校教諭を6年間勤めたあと、1925年「琉球新報」に入社。翌26年同じく地元紙の「沖縄朝日新聞」に移る。ルポルタージュ形式の取材では特に優れていたと言われる。1934年、今度は「朝日新聞」に移籍し、後に上間正諭氏も招き入れた。さらに、太

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

平洋戦争の敗北が濃厚だった1944年11月、乞われて一県一紙の統合紙「沖縄新報」に移り、編集局長の重責を担う。戦後「沖縄タイムス」の創刊（1948年5月）に加わり、役員として活躍する。1972年同社相談役になり、以後最高顧問として有形・無形に新聞を指導する。戦後は、平和運動や文化運動に加わり、沖縄を代表する文化人として人々の信望が厚かった。ちなみに、豊平さんには、直接にあるいは人を介してインタビューの申し入れを行ったが、戦時中のことは話したくないとお断りされてしまった。幽冥界にある今、インタビューを出来なかったことにたいして、断腸の思いを禁じ得ない。

- (16) インタビューは、1988年6月24日に実施。
- (17) 上間正論「冷たく凍える戦場体験」『アサヒグラファー特集敗戦・三十三回忌』1977年8月号 朝日新聞社 29ページ。
- (18) 川村一夫中尉は、当時沖縄電力の支配人をしていた父の川村八十雄氏に連れられ小学校の時東京から沖縄に転居した。1937年県立二中を卒業後、陸軍士官学校に進み1940（昭和15）年9月同校を卒業する（陸士54期卒）。その後中国から香港攻略戦に参加（第38師団歩兵第230連隊第4中隊—通称は東海林部隊）する。1942年10月、部隊のガダルカナル島侵攻作戦に基づき川村中尉も同島に上陸する。その後の戦闘経緯、戦死状況については不明である。川村中尉の弟で、同じく陸軍士官学校を卒業した温夫氏（陸士58期卒）との手紙のやりとり（在大阪府）、及び1989年7月7日実施のインタビューによれば「昭和18年の暮か翌年早くに志喜屋（孝信）先生や山城（篤男）先生らが発起人になり兄の追悼会を大典寺で盛大に催して下さいました」とのことである。川村中尉の戦死は、他の一般兵士と同じレベルで考えられたのか、もしくは県人以外の戦死者とみなされたのか、

沖縄地元紙で中尉のことが紙面に掲載された事実はない。ちなみに、川村温夫氏の御両親が静岡在の38師団の留守部隊から受領した白木の箱—一般には遺骨が納められているが—には、紙切れ1枚が入っていたのではないかと川村温夫氏は答えている。

- (19) 戦時下の検閲は、一般に1938年(昭和13)年に施行された「国家総動員法」第二十条に基づき1941(昭和16)年1月に公布された「新聞紙等掲載制限令」に則ってなされた。その主な項目としては、軍機・軍用資源秘密の保護や外国にたいする情報秘匿など広範囲にわたるものであった。特高と呼ばれる者たちは、こうした取締まりのために法規や罰則規定と照合しながら許可か不許可を決定した。『現代史資料(41)マス・メディア統制(二)』みすず書房 1975年参照。
- (20) 仲本政基氏が書かれた戦記ものに「沖縄戦秘録 壕の中で作られた新聞」というのがある。そこでは、戦前最後の新聞「沖縄新報」を印刷し終わり、(1945年)5月25日の夜明け前「逃げる道は島尻以外にはない」との判断のもと、全員南下することに決定したという。『沖縄公論』1950年 第7号 67ページ。なお、仲本氏の著作では具体的に知念半島—非戦闘地に下がったという言葉は使っていない。事実確認のため戦時下「沖縄新報」紙の専務の要職にあり、最後まで首里の壕に留まった高嶺朝光の『新聞五十年』(沖縄タイムス社1973年)を見てみたら首里から南下した後の集合地は知念地区と載っている(前掲書 320-321ページ)。
- (21) インタビューは、1988年6月21日に実施。
- (22) 「軍神大殲」に関わる沖縄県会の特別決議があったかどうか今のところわからない。その理由の第一は、1944年から1945年にかけての

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

県会の議事録、決議等が沖縄戦により消滅したことにある。第二は、当時の県会での状況を知る者が誰も発言していないことによる。ちなみに、1943年12月に開催された通常沖縄県会において大城（元）議員が、大冨大尉の武勲顕彰につき次のように泉守紀知事に質問している。「… 大尉の母校一中の学徒はすでに過半数が軍人志願をして大尉の後を継ぐべしと決起したほか、本県青少年から幾多の軍人志願者を出している。にもかかわらず県民一般には未だ徹底していない感がある。これをさらに強調し戦力増強への総決起運動を展開すべきではないか」。これに対し泉知事は次のように答弁している。「われわれの学生時代に比べて今の気持ちは実に真剣そのものである。… ただ陛下の御ために働いて死ねばよい、武士道とは死であるとまで硬く信じて忠道をひたすらに望む学徒、青少年の偉大な精神にはただただ頭が下がるばかりである。吾々は常にそこに思ひをいたし自らを反省して、今後も大冨精神を通じ県民の戦意高揚に務めるべきである」（「毎日新聞」沖縄版 昭和18年12月22日）。

- (23) インタビューは、1989年7月5日に実施。
- (24) 牧港氏には、米軍の捕虜になった後、収容所でズタ袋に書付けた多くの優れた詩作がある。その中で「戦争の生理」と題する戦場での状況を詩ったものがある。

戦争の生理

百人は まかなえそうな 巨大カボチャ
それを収穫とくずに そっとおいてきたという

四人がかりでも 持てそうにない
巨大カボチャは 首里には たくさんあった。

ある人家の空地に 累々と重なり合うように ころがっていた カボチャ
傍らの 頭蓋骨の 眼の穴から
董の花が やさしく顔を のぞかせていた

人間を肥やしにして 太ったカボチャの 悲哀
皆 それを恐れ
植物の 生理を憎んだ。

(牧港篤三「地獄を見た者」『昭和の戦争5 悲哭—沖繩戦』講談社
1985年 50—51ページ)。牧港氏には、長詩「空間の戦争」「新沖繩
文学」第39号 1978年9月があるが、何分にも長編詩でここで紹介
できないことが残念である。

- (25) 真喜志康忠『沖繩芝居50年』新報出版 1983年 98ページ。
(26) インタビューは、1988年7月21日に実施。
(27) 伊舎堂用久大尉は、1920（大正9）年石垣町登野城156番地に出生した。登野城小学校を卒業後、父用和の宮古島への赴任（裁判所勤務）に伴い宮古中学に進む。さらにそこから県立二中に進み、1938（昭和13）年3月、同校を卒業する。その後陸軍士官学校に現役入学、1941年同校を卒業した。以後、下志津、宇都宮の陸軍空学校を経て、太平洋戦争の勃発に伴いラバウル方面の任務につく。1944年には、台湾花蓮港宜蘭航空隊（台湾第八飛行師団傘下隷下の第九飛行団に所属）に転属となり、1945年、郷里石垣島の白保基地に誠第十七飛行隊（特攻機10機で編成）隊長として赴任した。1945年3月26日、同飛行隊10機は、確認機1機を従い、白保飛行場を離陸、沖繩本島西方にて作戦を展開する米英機動部隊に体当たりを行った。その時の功績により、4月10日誠飛行隊伊舎堂隊は上聞に達した。さらに、

沖 縄 戦 と 戦 争 動 員

同大尉は、2階級特進の榮譽をもらい中佐に昇級した。以上が、大まかな伊舎堂大尉の戦歴だが、大外大尉と比べるとその影は薄いといえる。その最大たる理由は、伊舎堂大尉の戦いが沖縄戦の渦中にあったことと、沖縄戦が文字通り日本人が体験した最後の戦闘であったからに他ならない。なお、伊舎堂大尉について言及した著書に、泉隆之介『天皇の艦長』 光文堂印刷 1985年、石垣正二『みのかさ部隊戦記』ひるぎ社 1977年、又吉候康助『千尋の海』 自費出版 1989年がある。

- (28) インタビューは、1989年3月9日に実施。
- (29) 「毎日新聞」沖縄版 昭和18年11月7日。
- (30) インタビューは、1989年3月20日に実施。
- (31) 「毎日新聞」沖縄版 昭和18年11月11日。
- (32) インタビューは、1989年3月10日に実施。
- (33) 大山正夫氏が、与那国島に渡航したのは、1944年7月22日前後と思われる。同年7月13日、那覇市奥武山公園運動場に於いて大外大尉の両親も参列して沖縄県主催の「大外慰霊祭」が盛大に催された。両親は、同月22日白木の箱に入った遺骨を貰って与那国島に帰ったという（黒島八重子さんとの1988年5月25日のインタビューから）。
- (34) インタビューは、1989年3月10日に実施。
- (35) 大田昌秀『近代沖縄の政治構造』勁草書房 1972年 332ページ。